帰去来集字十首　并引（一〇八一年）五言律詩

十首のうち七首

予喜讀淵明《歸去來辭》。因集其字為十詩　令兒曹誦之　號《歸去來集字》云。

予、喜んで淵明の《帰去來辞》を読む。因って、其の字を集めて十詩を為り、児曹をして之を誦せしめ、《歸去來集字》と号すと云う。

【題義】予は平生、喜んで陶淵明の帰去来の辞を読んでいる。そこで、その辞中の字を集めて、詩十詩を作り。児曹をしてこれを諷誦せしめることとし、号して帰去来の辞と言う。

其一

1 命駕欲何向　駕を命じて何くに向はんと欲する
2 欣欣春木榮　欣々として春木栄ゆ
3 世人無往復　世人往復なく
4 鄉老有將迎　郷老将迎あり
5 雲內流泉遠　雲内流泉遠く
6 風前飛鳥輕　風前飛鳥軽し
7 相攜就衡宇　相携へて衡宇に就き
8 酌酒話交情　酒を酌んで交情を話す

【語釈】•命駕…車を命じて外出する。•将迎…送り迎え。•衡宇…衡門屋宇。冠木門と屋根。《陶潜・帰去来辞》乃瞻衡宇　載欣載奔。

【通釈】車を命じて外出するが、いったいどこへ往こうとするのであるか。今しも春の木々は欣欣として栄に向かい、誠にのどかに心地よき時節。世上の人とは往復しないが、村の古老は喜んで迎える。道すがらの景色はといえば、流れ出る泉は遠く雲の内よりし、飛ぶ鳥は春風の前に舞って身も軽げに見える。やがて主人に導かれ。相携えて、とある衡門のある家に入り、酒を酌みつつ懇ろに交情を語り合った。

其三

1 與世不相入　世と 相入れず
2 膝琴聊自歡　琴を膝にして 聊か自ら歓ぶ
3 風光歸笑傲　風光 笑傲に帰し
4 雲物寄游觀　雲物 游観を寄す
5 言話審無倦　言話 審 に倦むなく
6 心懐良獨安　心懐 良に独り安し
7 東皐清有趣　東皐 清くして 趣 あり
8 植杖日槃桓　杖を植てて 日々に槃桓す

【語釈】•笑傲…笑いつつ世に傲る高情。あざ笑って威張る。•東皐…阮籍の奏記に《将耕于東皐之陽》皐は沢の水辺に地。槃桓…足の進み難き貌。去りがてにする。

【通釈】世間とは相容れず、そこで琴を膝にして。弾じつつ聊か自ら喜んでいる。四時の風景は、笑傲の高情に帰し、空の景色は游観を寄するに足りる。打ち解けて、語りつつ。明らかに倦むことなく、わが心はまことに暢気である。東の野らは清げに趣ある処から杖を立てたまま眺め暮らし日日去りがてにして居る。

其四

1 雲岫不知遠　雲岫 遠きを知らず
2 巾車行復前　巾車 行きて復た前む
3 僕夫尋老木　僕夫は 老木を尋ね
4 童子引清泉　童子は 清泉を引く
5 矯首獨傲世　首 を矯げて独り世に傲り
6 委心還樂天　心に委せて 還た天を楽しむ
7 農夫告春事　農夫 春事を告ぐ
8 扶老向良田　老を扶けて 良田に向ふ

【語釈】•巾車…布帛で覆い飾った車。ほろをかけた車。《陶潜・帰去来辞》或命巾車或棹孤舟《儲光羲・游茅山詩》巾車雲路入，理棹瑤溪行。楽天…天理を楽しむ。自分の境遇に安んずる。《易・繫辭上》樂天知命故不憂。•春事…春の野良仕事。

【通釈】雲の湧き出づる谷の遠きを知らず、そこへ往こうと思い、巾車に駕して出かけたことがある。その間、家僕は、庭にでも植えるつもりか、老木を尋ね、童子は清泉を引き来る計画をして居る。首を嬌げて青空を望みつつ、ひとり世に傲り、心を自然に任せて、又ぞろ、天を楽しむ様になった。農夫は春に成って野良仕事が始まるといって、わざわざ告げ来たりしに因り、老躯を扶けて、わが良田に向かい、その模様を眺めて居る。

其五

1 世事非吾事　　世事は 吾が事に非ず
2 駕言歸路尋　　駕して言に 帰路を尋ね
3 向時迷有命　　時に向って 迷ふ命あり
4 今日悟無心　　今日 悟って心なし
5 庭内菊歸酒　　庭内 菊 酒　に帰し
6 窓前風入琴　　窓前 風 琴　に入る
7 寓形知已老　　形を寓して 已に老ゆるを知るも、
8 猶未倦登臨　　猶ほ未だ 登臨を倦まず

【語釈】•寓形…形をやどす。身を置く。形骸(からだ・肉体・外形)体を一時的に住まわせる。《陶潜・帰去来辞》已矣乎　寓形宇内復幾時　曷不委心任去留。已んぬる乎形を宇内に寓すること復た幾時ぞや、曷んぞ 心を委ねて去り留まるに任せざるや。

【解釈】世間のごたごたは、吾が関係したことでもないから、車に乗って帰路を尋ぬることにした。時々思い迷うたのも、天命であって、今日悟って見れば何等の執着もない。庭内には菊があって、観賞の後には酒を飲み、窓前には琴が置いてあって、風が空音を弄することがある。形骸をこの世に寓して、すでに年老いたるを知りつつも、高登臨眺は決して厭きることがない。

其七

1 觴酒命童僕　酒を觴せむとして 童僕に命じ
2 言歸無復留　言に帰らば 復た留まるなし
3 輕車尋絶壑　軽車 絶壑を尋ね
4 孤棹入清流　孤棹 清流 に入る
5 乘化欲安命　化に乗じて 命を安ぜんと欲し
6 息交還絶游　交を息めて 還た游を絶つ
7 琴書樂三徑　琴書 三径を楽む
8 老矣亦何求　老たり 亦た何をか求めむ

【語釈】•觴酒…はさかずき、酒を酌む。•乘化…化は陰陽の変化。絶游…往来を絶つ。三径…庭中に三條の小路をかけたるをいう。後漢の蔣詡が松・竹・菊を植えた故事。

【解釈】酒の支度を童僕に命じて、さきに遣り、すでに帰ろうと思えば、決して留まって居らぬ。軽車に乗じて絶壑を尋ね、孤棹、舟をやって清流に入るは、ともに興あることながら、帰ると言ったら必ず帰る。ここに、天地陰陽の化に乗じて、わが命を安んぜんとし、すでに交際を止めた上は、併せて往来を廃絶する外はない。そこで琴を弾じ、書を読みつつ、三径の景色を楽しみ、もはや年老いたる上は、何も外に求めることはない。

其八

1 歸去復歸去　帰り去り 復た帰り去る
2 帝鄉安可期　帝郷 安んぞ期すべき
3 鳥還知已倦　鳥 還って 已に倦むを知る
4 雲出欲何之　雲 出でて 何くにか之かんと欲する
5 入室還攜幼　室に入って 還た幼を携へ
6 臨流亦賦詩　流れに臨んで 亦た詩を賦す

7 春風吹獨立　　春風 独り立って吹く
8 不是傲親知　　是れ 親知(しんち)に傲るならず

【語釈】•帝郷…天上をいう。仙界。•独立…超然として立っている。蘇軾の心境が表されている。縦筆其の二にも独立の心情が察せらる。

【解釈】帰り去りし後、復た帰り去ろうと思うが、天上は必ずしも行かれるという訳でもない。鳥が飛び帰ったのは、すでに倦んだからであろうが、雲は岫を出でて、何処に往こうとするのであるか。室に入って例の如く、幼児を携え水流に臨んでも、亦た詩を作る。ぬるき春風の吹き渡る中に、一人超然として立っているのは、景色に見惚れているからであって、決して親友どもに傲って居るのではない。

其十

1 寄傲疑今是　　傲(ごう)を寄す 今の是なるを疑い
2 求榮感昨非　　栄(えい)を求む 昨の非なるを感ず
3 聊欣樽有酒　　聊(いささ)か欣(よろこ)ぶ 樽に酒あるを
4 不恨室無衣　　恨みず 室に衣(ころも)なきを
5 邱壑世情遠　　丘壑(きゅうがく) 世情 遠く
6 田園生事微　　田園 生事 微なり
7 柯庭還獨眄　　柯庭(かてい) 還た独り眄(み)る
8 時有鳥歸飛　　時に 鳥の帰り飛ぶあり

【語釈】•寄傲…世俗に傲る高情が寄せる。•求榮…栄達、即ち出世を求める。世情…俗情に同じ。•生事微…生事は生活上の事、微はささやか。•柯庭…木の茂れる庭上。

【解釈】世俗に。傲る底の高情を寄せ得たるより、今日の是なるを疑い、出世を願っていた所から昨日の非なることをつくづく感じた。樽中に酒あるは、聊か喜ぶべく、室中に衣なきことなどは、なんとも思わぬ。山谷の間を、跋渉すれば、俗情はいつとなく遠ざかるし、田園に居ると生活状態も自然ささやかである。木々の茂れる庭上を独り眺めて居ると、時として、鳥の帰り飛ぶのが見える。